

- 2015/03/31 [ガンジーは「企業お抱え NGO」元祖：アルンダティ・ロイ](#)
- 2015/03/29 [エベレストでも丸裸，グーグルストリートビュー](#)
- 2015/03/26 [出入国管理事務の民間委託](#)
- 2015/03/25 [「かぐや姫の物語」，リアリティの欠如](#)
- 2015/03/23 [秀作：コウケンテツが行くネパール](#)
- 2015/03/21 [信号待ちで涙した，その心は？](#)
- 2015/03/20 [京都の米軍基地\(66\)：米軍幹部，続々来訪](#)
- 2015/03/19 [早春の野草と野獣](#)
- 2015/03/18 [30 党連合，第二波抗議闘争](#)
- 2015/03/17 [セピア色のネパール\(2\)](#)
- 2015/03/16 [セピア色のネパール\(1\)](#)
- 2015/03/15 [京都の米軍基地\(65\)：米軍とキリスト教](#)
- 2015/03/11 [皇太子憲法言及不掲載，答えにならない朝日新聞の「お答え」](#)
- 2015/03/01 [「改宗の権利」勧告英大使，辞任](#)

ガンジーは「企業お抱え NGO」元祖：アルンダティ・ロイ

アルンダティ・ロイが，またまたガンジー（ガンディー，ガーンディー）を批判し，猛反撃を受けている。



■ロイ

ロイは，以前からガンジーの非暴力不服従運動には懐疑的であった。ロイによれば，ガンジー主義は，観衆を前提とする劇場型抵抗であり，たとえばチャッティスガルの村でのように，完全に包囲され外部から遮断された状況ではまったく無力だということだ。

これは，ガンジーに対するロマン・ロランの批判と原理的には同じである。すなわち，たとえ観衆がいても，聞く耳を全く持たないヒトラーのような支配者には，ガンジー主義は無力だ，ということ。

【参照】

▼[ガンディー劇場型抵抗の限界：A. ロイ](#)

▼[Un-Victim: 「武器を持つガンディー」としてのロイ\(1\)](#)

▼[2010/04/23 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(8\) \(7\) \(6\) \(5\) \(4\) \(3\) \(2\) \(1\)](#)

また，カースト制についても，ロイは2014年7月17日のケララ大学での講演において，「理想的バンギ(The Ideal Bhangi)」(1936)を引き合いに出し，ガンジーを「カースト主義者」と批判し，ガンジーの名を冠した大学などの機関は改名すべきだと述べ，告訴騒ぎを引き起こしていた(*3-5)。

【参照】 Gandhi, "The Ideal Bhangi," Harijan, 28 November, 1936

The ideal Bhangi of my conception would be a Brahmin par excellence, possibly even excel him. It is possible to envisage the existence of a Bhangi without a Brahmin. But without the former the latter could not be. It is the Bhangi who enables society to live. A Bhangi does for society what a mother does for her baby. A mother washes her baby of the dirt and insures his health. Even so the Bhangi protects and safeguards the health of the entire community by maintaining sanitation for it. The Brahmin's duty is to look after the sanitation of the soul, the Bhangi's that of the body of society. But there is a difference in practice; the Brahmin generally does not live up to his duty, the Bhangi does, willy-nilly no doubt. Society is sustained by several services. The Bhangi constitutes the foundation of all services. [...]

このように、ロイのガンジー批判は周知のことだったが、今回は、それらに加え、ガンジーを「企業 NGO」元祖と断罪したのだ(*1-2)。

3月21日、ロイは「第10回 ゴラクプル映画祭」に出席し、開会スピーチを行った。ロイはこう述べた。インドでは、タタなど大財閥がほとんどすべてを支配し、言論表現も例外ではない。アメリカで、フォード財団やロックフェラー財団が「資本主義プロパガンダ」を支援しているのと同じこと。ところが、この映画祭は企業支援を受けず、人々の寄付で10年間にわたり運営されてきた。これは高く評価される。

そもそもガンジーは、「この国の最初の企業お抱え NGO」である。「彼(ガンジー)は、ダリット、女性、貧者について実にひどいことを書いているのに、この国では彼を崇め礼拝している。これは、この国の最大の誤りの一つだ。」

以上のようなロイの発言に対し、会場からは、偉大な国父ガンジーを「企業の手先」などと呼ぶべきではない、といった激しい反論が出された。これに対しロイは、「私は、彼(ガンジー)についてよく研究し、彼が1909~1946年に書いたものに基づき、こう述べたのだ」と答えた。ロイのガンジー批判は筋金入りだ。

ロイは、おそらく現代の最も過激で行動的な反体制知識人の一人であり、そして何より素晴らしいのは、本質を突く鋭い議論を巧みなレトリックで表現し提供してくれる、その有り余るばかりのサービス精神。こんな面白くて為になる危険な過激派知識人は、現代ではまれといってよいだろう。

*1 Abdul Jadid, "Mahatma Gandhi was first corporate sponsored NGO of the country: Arundhati Roy," Hindustan Times, Mar 22, 2015

*2 Pratihtha Khattar, "Striking Sparks: Arundhati Roy On Gandhi, Again," 23 Mar, 2015

(<http://economydecoded.com/2015/03/striking-sparks-arundhati-roy-on-gandhi-again.html>)

*3 Viju B, "Mahatma Gandhi was a casteist, Arundhati Roy says," The Times of India, Jul 18, 2014

*4 Jason Burke, "Arundhati Roy accuses Mahatma Gandhi of discrimination," The Guardian, 18 July 2014

*5 "Gandhi Looked Down upon Dalits, Says Arundhati Roy," Express News Service, 18th July 2014

谷川昌幸(C)

エベレストでも丸裸, グーグルストリートビュー

グーグルストリートビューが、ルクラ、ナムチェからエベレスト・ベースキャンプにまで進出した。こんなところにまで**侵入**し、秘境を脱神秘化することもあるまいに、秘所のぞきは金になり、やめられないらしい。プライバシーは、もはやエベレスト界限でも、ないものと覚悟せざるをえない。たとえば、これらの写真を見よ（解像度を下げ掲載）。一応、申し訳程度のモザイクをかけているが、本人は言うに及ばず、多少とも本人を知っている人であれば、写っているのが誰かはすぐわかる。なぜ、人体全部を消さないのか？ このような醜い顔修正写真の無断無期限世界公開は、名誉毀損、人格権侵害だ(下記参照)。



■エベレスト・ベースキャンプ



■タンポチェ／シャンポチェ空港



■エベレストビューH・／ナムチェ





■ナムチェ



こうした批判は、世界各地から日々おびただしく寄せられているらしく、グーグルもメシのタネを死守するため、言い訳、弁明にこれつとめている。「ストリートビューの画像を収集する際に、顔やナンバープレートをぼかすなど、個人のプライバシーと匿名性を保護するための対策を行っています。保護すべき画像や問題のある画像を見つけた場合は、ストリートビュー チームにご連絡ください。」

まるで逆だ。時間も専門的な知識や技術もない一般市民は、世界中をのぞき回り、ネットに掲載していくグーグルを常時監視することなど、およそ不可能だ。そのような不可能な注意義務の一方的要求は、正義に反する。圧倒的な強者のグーグルこそが、写る人、あるいは写ってしまった人一人一人の許可を取得してから、撮影し、あるいは公開すべきだ。



■「強者の権利」表示

そもそもプライバシー(privacy, private)は、公共・公開(public)の対概念。隠れて在ることは、人権の基本の基本であり、秘密をすべて暴かれてしまえば、人は人ではなくなる。人は、隠れるために顕れ、顕れるために隠れる。隠すために見せ、見せるために隠す。

ヒマラヤの秘境ですらグーグルを意識せざるをえないとなれば、他は推して知るべし。現代人は、もはや隠れて在る自由をあらかじめ喪失してしまったといわざるをえないだろう。

【参照1】[国際人権法のプライバシー保護](#)

「国際人権法は、あらゆる人のプライバシーへの権利と恣意的または違法な干渉からの保護を保障している。国際法では、プライバシーへの権利は一般的に、自身に関わる情報がどのように取り扱われているのを知り、それを不当な遅延や代償なく、かつ分かりやすい形で取得し、そして違法、不必要または不正な記載がある場合には適宜訂正や消去をしてもらえる権利として定義されている。ある人の私生活に関する情報が第三者に渡り、国際人権法に反した目的で使用されることのないよう、効果的な措置を取る必要がある。」

(UNHCR「庇護情報の秘密保持の原則に関する助言的意見」2005年3月)

【参照2】[「ウェブカメラ、ネットで丸見え3割」朝日新聞デジタル](#) 2015年3月16日

「[調査したウェブカメラの] 35%にあたる769台がパスワードを設定することによって第三者からのアクセスをブロックする対策をとっておらず、映像を見たり音声を聞いたりできた。……ほとんどが防犯や監視用として設置され、レンズが向けられている対象と状況から書店や美容院、飲食店、スーパーなどとみられた。事業所の従業員控室、幼い子どもたちがいる託児所のようなスペースもあった。」

2015/03/29 at 10:41 カテゴリー: [情報IT](#), [旅行](#), [人権](#)

Tagged with [ウェブカメラ](#), [エベレスト](#), [プライバシー](#), [監視カメラ](#), [私的領域](#), [公的領域](#), [強者の権利](#)

出入国管理事務の民間委託

出入国管理事務の民間委託をめぐり、もめている。提案は、内務省（バンデム・ゴータム副首相兼内務相 [UML]）。内務省によれば、現行出入国管理事務は不効率であり、ICAO（国際民間航空機関）の要請している e-VISA の発行にも対応しきれないので、ビザ申請関係書類のとりまとめ作業を民間委託する。委託期間は当面 15 年間。ビザ発行そのものを民間委託するわけではない。こうした作業は英国も、VFS Global に委託している。

こうした内務省提案に対し、議会では、治安などを理由に反対が噴出し、ゴータム内相やパンディ外相を 3 月 29 日に「国際関係・労働関係委員会」に呼び、説明を求めることになった。

ネパールのビザ手続、特に延長手続は、たしかに不合理で面倒だ。ネパールの人々のパスポート取得手続のことはよくしらないが、一般の人々にとっては、これもおそらく面倒なのだろう。だから、出入国管理事務が民間委託により合理化されるのなら、その方がよいのでは、と思わないでもない。治安上も、信頼できる専門機関なら、その方がかえって安全かもしれない。

しかし、ここでややこしいのが、この問題も、ご多分に漏れず、政争がらみということ。新聞記事によれば、民間委託反対の急先鋒は、UML の MK・ネパール幹部らしい。UML 党内抗争が、内政にそのまま持ち込まれている。ネパール政治の難しさは、こんなところにもあるとってよいだろう。



* KOSH RAJ KOIRALA, "GOVT PLAN TO OUTSOURCE IMMIGRATION SERVICES DRAWS FLAK," Republica, 25 Mar 2015

* "Visa scam rages in House Panel summons DPM Gautam, FM Pandey over 'secret' govt deal with private firm," Kathmandu Post, MAR 26, 2015

2015/03/26 at 18:13 カテゴリー: [政党](#), [旅行](#) Tagged with [ビザ](#), [民営化](#)

「かぐや姫の物語」, リアリティの欠如

「かぐや姫の物語」が早くも TV 放映されたので、派手な宣伝にのせられ、観てみた。「公式サイト」によれば、この映画は――

日本最古の物語文学「竹取物語」に隠された人間・かぐや姫の真実の物語。

姫の犯した罪と罰。

製作期間 8 年、製作費 50 億円の娯楽超大作。



しかし、「姫の犯した罪と罰」をうたっているにもかかわらず、この映画は物語の構成が甘く、本物のフィクションの神髄たるリアリティも作品としての深みも感じられない。とくに物語の展開をナレーションや登場人物の語りで説明するのは興ざめ。

これは、先の「[風立ちぬ](#)」を観たときと同じような印象。日本のアニメは、全体的に、かつてのような想像力・構想力・創造力を失いつつあるのではないだろうか？ もとより、これは趣味判断だから、他の見方や評価もありうることは言うまでもないが。

[参照] [Sophia Pande, "The Tale of the Princess Kaguya," Nepali Times, 20-26 March 2015, #750](#)
I have always loved Studio Ghibli's productions, referring to them often in my reviews, especially when talking about animation that is not a product of this blessed dream factory. While Hayao Miyazaki, [...] did not direct The Tale of the Princess Kaguya (2013) which is co-written and directed by Isao Takahata, it is nevertheless one of the most charming and uplifting films to come out of the famed animation studio. [...]

谷川昌幸(C)

2015/03/25 at 19:47 カテゴリー: [文化](#) Tagged with [アニメ](#), [ジブリ](#), [フィクション](#), [リアリティ](#)

秀作：コウケンテツが行くネパール

ネパール関係のドキュメンタリは、遠方の小さな国の割には多いものの、安易な作品で失望することも少なくないが、3月21日にNHK-BSで放送された「アジア食紀行 コウケンテツが行くネパール」は、なかなかよくできた秀作であった。

何よりもよかったのが、コウケンテツ(高賢哲)さんが取材対象たるネパール料理に興味津々、一緒につくり、食べ、心から楽しんでいることが、よく伝わってきた点。

また、それに加え、都市部と南部タライと北部丘陵の生活、あるいはカーストや女性の境遇など、ネパール社会の実情が、さりげなく描かれ、生活実感として「ああ、そうなのか」と自然に感得できる点も、ドキュメンタリとして優れており、好感が持てる。ネパールのやさしさを、ほのぼのと描いた秀作。(下掲はNHK-BS 放送画面より)



谷川昌幸(C)

2015/03/23 at 12:25 カテゴリー: [文化](#), [旅行](#), [民族](#) Tagged with [ドキュメンタリ](#), [食文化](#), [料理](#)

信号待ちで涙した、その心は？

中島 恵「『中国はよくなっている！』信号待ちで思わず涙した私」（日経ビジネスオンライン，2015年3月20日）は、なかなか興味深い中国論だ。要旨は以下の通り。

「上海市内で私が宿泊しているホテルの近くにある横断歩道に立っていたときだ。私の斜め後ろにいた母子の会話が耳に飛び込んできた。『ほら、あそこを見てごらん。赤信号でしょう？ あそこが赤のときは渡っ

ちやいけないんだよ。あれが青色になったらお母さんと一緒に渡ろうね。いいね』。……とてもうれしくて、心がホカホカと温まる気持ちになった。そのとき、赤信号で立ち止まっていたのは私たち3人だけだった。大勢の人々は当たり前のように横断歩道をどンドンと渡っている。……青信号になって、ようやく母子と一緒に堂々と道路を渡ることができたとき、目からどンドン涙があふれてきて、止まらなくなってしまった。……そう、私はこの瞬間、気がついた。中国社会はだんだんと、よくなっているのだ——と。」

著者によれば、この信号待ち以外にも、空港係員や店員のマナーの向上、水道・トイレ等の生活インフラの改善など、他のいくつかの点で、「これまでとは明らかに違う流れ」がみられ、「中国社会がよくなっている」と感じられるというのだ。

中国は大国なので、「中国は…」とか「中国人は……」などと一般化していうことはできないが、少なくとも私が見た限りでは、中国の航空会社や空港などは、利用のたびにサービスが目に見えて向上し、いまでは日本以上に合理的で便利な場合も少なくない。そうした実感をもつ私にとって、「中国はよくなっている！」という著者の印象は、十分によく納得できることである。

しかし、それはそれとして、少々気がかりなのは、著者の極端な上から目線である。現在の日本社会を基準として、それに合わない中国社会のあり方を一方的に切り捨てる。たとえば、「『ルール軽視』の無秩序な国」など。

しかしながら、交通ルールにせよ接客マナーにせよ、すべて文化であり、日本、しかも東京を基準として断罪するのは、あまりにも一方的すぎる。たとえば、歩行やエスカレーター利用では、一般に、東京と大阪では位置が逆であり、東京人は大阪ではマナー知らずの野蛮人となる。あるいは、水道やトイレトペーパーでも、自然保護派からは浪費の悪徳と非難されるであろう。日本を基準とする他文化批判は、ちまたにあふれる「日本はスゴイ！」合唱と同様、はしたなく、慎みなく、みっともないといわざるをえない。

恥ずかしながら、私は以前、真冬の深夜の人家もない田舎の犬一匹通らない田んぼの中の見通しのよい交差点の赤信号で止まり、青信号に変わるのをじっと待っているホンダ・カブ号の村のお年寄りを見て、思わず涙したことがある。

なお、蛇足ながら、近代的信号機システムを非人間的と考え、ロータリー式に替えつつある国々からすれば、日本の「赤は止まれ、青は進め」は機械隷従、「おくれてる～」と哀れまれることになるであろう。



2015/03/21 at 17:14 カテゴリー: [社会](#), [文化](#), [中国](#) Tagged with [ロータリー](#), [法の支配](#), [交差点](#), [人の支配](#), [信号](#)

京都の米軍基地(66): 米軍幹部, 続々来訪

京丹後の米軍基地へ、米軍幹部が入れ替わり立ち替わり視察に来ている。最近(日時不明*)も、「宇宙ミサイル防衛軍」マン司令官(中將)がやってきて、基地内外を視察した。(*米軍広報は、マーシャル諸島クエゼリン米軍基地の視察後、3月12日、グアムと日本へ向け出発と発表しているので、京丹後視察はその数日後であろう。)

「宇宙ミサイル防衛軍(Space and Missile Defense Command [SMDC])」とは名前からしておどろおどろしく、SF未来戦争を思わせる。米軍の中でも、この分野では由緒正しき最先端重要部隊なのであろう。

司令官のマン中將がどのような地位の方かは、軍のことはよく知らないのですが、想像するしかないが、胸の記章を見ただけでも、かなりエライ方だと見てまちがいあるまい。そんな米軍の幹部が、はるばる丹後半島くんだりまで来てくださる。これはたいへんなことだ。

一方、お隣の日本側はといえば、空自分屯基地の第35警戒中隊にすぎない。記念撮影でも、どう見ても釣り合いがとれていない。米軍がこれほど重視しているのだから、日本政府も経ヶ岬基地を大幅に拡張し、宇宙戦争に対処しうる最先端拠点軍事基地とすべきだろう。

ウワサでは、すでに日本側も空自基地の拡張を始めているようだ。さすが積極的平和主義の日本国、イケイケドンドン、米国になど負けてはいない。



■空自分屯基地記念撮影。マン司令官右隣が第35警戒隊長



■マン司令官／胸の記章



■宇宙ミサイル防衛軍章／第35警戒中隊章

[追加 2015-03-21] 大統領夫人，経ヶ岬駐留米兵激励



■ミシェル・オバマ米大統領夫人，第14ミサイル防衛中隊の米兵らを激励。伊丹空港，3月20日。

谷川昌幸(C)

2015/03/20 at 19:31 カテゴリー: [軍事](#)

Tagged with [オバマ大統領](#), [ミサイル防衛](#), [米軍基地](#), [経ヶ岬](#), [Xバンドレーダー](#), [京丹後](#)

早春の野草と野獣

3月中旬，野草が一斉に小さな花をつけ，ウグイスがさえずりの練習を始めた。心なしか浮き浮きする。

ところが，野草といっても，このところ勢力を急拡大しているのは，外来種。写真のスマレらしき花も，どこから飛んできて根つき，いち早く花を咲かせた外来種だろう。とにかく，外来種は，やたらと強い。少々のことでは枯れない。しかも，たいてい美しい花をつける。困ったような，うれしいような。

動物もそうだ。畑は三重に網を張ったが、イノシシやサルに加え、生命力あふれ悪知恵にたけた外来動物も増えており、専守防衛で防御できるかどうか、心許ない。ここはやはり、集団的自衛権を行使し、村民一丸となって、外来動物テロ攻撃を撃退せざるをえないだろう。

春到来はうれしくもあり、ゆううつでもある。



■これは外来種(たぶん)



■これらは在来種(たぶん)



■専守防衛の猫の額

谷川昌幸(C)

2015/03/19 at 09:19 カテゴリー: [自然](#) Tagged with [過疎化](#), [農業](#), [外来種](#)

30 党連合，第二波抗議闘争

マオイスト主導 30 党連合は、3 月 19 日～4 月 9 日、多数決ではなく合意による憲法の制定を求め、第二波抗議闘争を実施する。ゼネスト(バンダ)もあるらしい。

一方、パイダ派マオイスト (CPN-M)は、プラチャンダ派マオイスト (UCPN-M)に接近、再統合を交渉している。NC,UML の出方にもよるが、いまのところ早急な再統合は難しそうだ。

肝心の新憲法については、草案は何通りか出来上がっているはずだが、1月22日期限切れ以降、これといった動きはない。次は5月末といわれているが、さてどうなるか？

そもそも、ネパールに本当に成文憲法は必要なのか？ 正式成文憲法などなくても、あった時と大差なく、そこそこうまくやっていたのだから、やはり成文憲法などいらぬのではないのか？

英国がお手本。成文憲法などなくても、その気になれば、やっていた。日本製信号機などなくても、ネパールの交差点は、ちゃんと立派に機能している。それと同じこと。

▼セピア色のネパール：1993年8月



■ダクシンカーリ。退色し補正しきれない。新憲法ができると、ここでの動物供犠も禁止されるかもしれない。



■時間はまだ時計に奪われることなく、ふんだんに有り余っていた。

谷川昌幸(C)

2015/03/18 at 10:41 カテゴリー: [マオイスト](#), [憲法](#), [文化](#), [旅行](#), [歴史](#) Tagged with [ダクシンカーリ](#), [制憲議会](#), [時間](#)

セピア色のネパール(2)

カトマンズ盆地の古都が好きになった理由の一つが、レンガ敷き路地。下の写真は1993年8月のものだが、これらを見ると、通路はレンガ敷きだ。広いバス道路以外は、まだ多くがレンガ敷きだったのだ。

レンガ敷き路地は情緒があり大好きだが、自動車が進入し始めると、あっという間に傷み、コンクリートかアスファルトに変えられてしまう。いまのキルティプルがその好例。あと2、3年もすれば、レンガ敷き通路はほとんどなくなってしまうであろう。

また、1993年の写真を見ると、カトマンズ盆地でもまだ裸足の人がかなりいたことがわかる。まだ、裸足でも危険ではなかったのだ。私自身、村では裸足で走り回っていた。いま、そんなことをすれば、すぐ怪我をする。裸足が野蛮というのは、文明病患者の偏見に過ぎない。



谷川昌幸(C)

2015/03/17 at 17:43 カテゴリー: [文化](#), [旅行](#), [歴史](#) Tagged with [カトマンズ](#), [レンガ](#)

セピア色のネパール(1)

昔の写真が、未整理のまま段ボールに放り込んである。いずれも観光写真だから特にどうということはないが、それでも、そろそろデジタル化しないと退色し見られなくなってしまうのは、少々おしい。そこで、一念発起、少しずつデジタル化することにした。

デジタル化は、セピア色のままがよいのか、それとも色補正した方がよいのだろうか？ 素人には、よくわからない。下掲は、1993年8月のカトマンズ。まだ車もバイクもほとんど見られない。色補正してある。



谷川昌幸(C)

2015/03/16 at 21:45 カテゴリー: [文化](#), [旅行](#) Tagged with [カトマンズ](#), [歴史](#)

京都の米軍基地(65): 米軍とキリスト教

米軍基地経ヶ岬通信所と京丹後市国際交流協会の主催で、キリスト教の復活祭を祝う「宗教行事」が実施されるそうだ。これが、その案内。

▼米軍フェイスブック

イースター・エッグハント☆

日時：4月5日(日)10時～ 場所：セントラーレ・ホテル京丹後, 参加費：無料

主催：米軍基地経ヶ岬通信所、京丹後市国際交流協会

内容：十字架にかけられて亡くなったイエス・キリストが、三日目に復活したことを記念・記憶する“復活祭(イースター)”を祝うため、特別に飾付けられたイースター・エッグ(お菓子が詰まったプラスチック卵)を、イースター・バニーというウサギが隠し、復活祭の朝にその隠された卵を子供たちが探すという文化が、主に欧米で毎年春に行われます。皆さんもこのエッグハンティングを体験してみませんか？ アメリカの文化、そしてアメリカ人とふれあえる貴重な機会になりますので、多くのお子様・保護者様のご参加を受付けております！

▼「広報きょうたんご」(2015年2月15日)

アメリカの文化にふれてみませんか 「イースター・エッグハント」

📅4月5日(日)10時00分～11時00分
📍セントラーレ・ホテル京丹後(大宮町三坂)

📌Egg Hunt (エッグハント)とは、プラスチックのカラフルな卵の中にお菓子やおもちゃが入ったものを、庭や公園の芝生などに隠し、それを子どもたちが探すアメリカの遊びです。アメリカの文化や人とふれあう機会として、「イースター・エッグハント」を開催します。

共催:市国際交流協会・米軍基地経ヶ岬通信所

👤幼児～中学生以下

👥100人(申し込み先着順。保護者は定員に含まれません) 📄無料

📞事前に電話で以下へ申し込んでください。

📍市国際交流協会(企画政策課内
☎69-0120)

何よりもまず先に、ここで米日両案内文を比較してみよ！ 正文は、もちろん米軍側案内。なぜ、日本側が、こんなとんでもない「誤訳」をしたのか？ いうまでもあるまい。下記のような批判が、そのまま当てはまることを恐れたからにちがいない。しかし悲しいかな、主導権は米軍側にある。そんな植民地根性丸出しの日本側の卑屈な配慮などまったくお構いなく、正々堂々、平然と、宗教行事として、日本人住民に向け日本語で案内したのだ。正直な米軍！ 立派な米軍！

この米軍側案内が呼びかけているように、復活祭は、宗教色が薄れてきたとはいえ、れっきとしたキリスト教の宗教行事。ブリタニカも、「イエス・キリストの復活を祝うキリスト教最古、最大の祝日」と説明している。

そのキリスト教行事としての復活祭を、キリスト教徒が自分たちだけで祝ったり、あるいは私的に友人や知人、あるいは一般の人々に参加を呼びかけるのは、もちろん自由である。そうした形であれば、大いに祝われてよいし、信者の友人に誘われたら、私も参加するかもしれない。

しかし、進駐米軍が軍として、そして京丹後市国際交流協会が協会として、復活祭を主催し、一般市民に参加を呼びかけるのは、いかがなものか？

参加費は無料となっているが、いったい誰が、経費を負担するのか？ 米軍が出すのか？ それとも、京丹後市国際交流協会が負担するのか？ あるいは、折半か？ ちなみに、交流協会は、設立と運営に市が深く関与している。

京丹後市国際交流協会は、市の企画推進課の肝いりで平成 20 年 3 月設立された。

会員＝個人 143、団体 4 (H24)、

京丹後市補助金＝110 万円(H23)、80 万円 (H24)、根拠法令なし。単費財政負担

こうした事実を考え合わせるなら、この行事には、「政教分離の原則」の観点から、根本的な疑問を感じざるをえない。

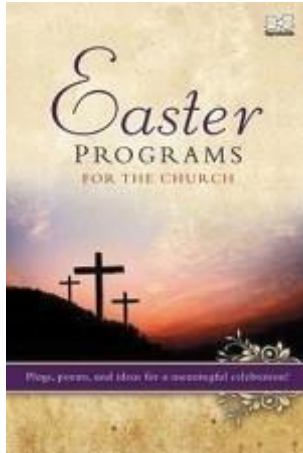
また、それに加え、文化の観点からも、ここには見過ごせない問題がはらまれている。そもそも米軍はれっきとした軍隊であり、暴力装置である。その米軍が、軍事力を背に、進駐先の現地住民をキリスト教行事に勧誘する。これは、これまでに世界各地で深刻な紛争を引き起こし問題とされてきた、先進キリスト教強国による宗教侵略・文化侵略と、本質的には、同じことである。

様々な文化や宗教の競争的共存は、文化を発展させ豊かにしてくれるが、たとえ間接的にであれ、また金銭的にも多額ではないにせよ、ある特定の宗教ないし文化が軍隊や公権力をバックに宣伝される場合、文化間競争・宗教間競争は、もはや公平とはいえない。

そうした状況では、不利な立場に立たされる側の宗教や文化が反発し、根深く難しい宗教紛争や文化対立を引き起こす場合が多い。それは、途上国の現状を見れば、明らかである。

米軍は、米国を守るための先兵として、はるばる丹後半島にまでやってきたのだから、進駐先でやっかいなもめ事を引き起こすのは本意ではあるまい。外国軍が進駐先で嫌われるのは、いつでも同じこと。そう覚悟してあきらめ、できるだけ波風立てないように、ひっそり静かに駐留するよう心がけるべきだろう。

▼参考：復活祭関連本表紙



[追加 2015-03-18]

米軍は、3月14日、横浜で行われたカトリック「聖パトリック祭」パレードに参加した。ここでも政教一致、軍教一致。



谷川昌幸(C)

2015/03/15 at 14:41 カテゴリー: [軍事](#), [宗教](#), [文化](#)

Tagged with [キリスト教](#), [米軍](#), [Xバンドレーダー](#), [多文化共生](#), [文化侵略](#), [京丹後](#)

皇太子憲法言及不掲載，答えにならない朝日新聞の「お答え」

朝日新聞が、またまた記事批判への言い訳記事を掲載した。菅野俊秀（社会部次長）「皇太子さまの憲法への言及、なぜ載ってないの？ Re：お答えします 新しい発言紹介 指摘真摯に受け止めます」（朝日3月10日）。（皇太子の憲法言及については、[「あつものに懲りて憲法を消す朝日新聞」](#)参照。

これは、読者の質問への「お答え」の形を取っているものの、内容的には、皇太子憲法言及不掲載を批判した池上彰氏への弁解であることは明白である。要旨は以下抜粋の通り。

「[皇太子の憲法言及は] 昨年記事に盛り込みました。……今年も、デジタル版の記事では皇太子さまが憲法に言及した部分も含めて、会見全文とともに掲載しました。しかし、紙面ではスペースが限られ、できるだけ新しい内容を読者に伝えようと、前述の部分を優先させました。」（朝日 3月10日）

しかし、スペース不足でカットしたなどという弁解を額面通り受け取るお人好しで脳天気な読者は、一人もいないだろう。改憲や「70年談話」問題が連日マスコミで報じられているさなか、皇太子が戦争の惨禍や平和の大切さと関連づけて憲法に言及した。当然、大きな政治的意味を持ちうる。その皇太子発言を、朝日新聞は掲載しなかったのだ。

2

好意的に解釈するならば、記事を執筆した皇室担当記者が、皇太子や皇室が政治に巻き込まれるのをはばかり、憲法言及部分をカットした、ということになるだろう。ちなみに、その皇室担当記者ツイッターは、皇室記事満載。

しかしながら、[前回も述べたように](#)、天皇には憲法尊重擁護の義務があり、機会あるごとに天皇や皇族が憲法尊重の立場に立つ発言をするのは当然のことである。もし、それを非難する者がいるとすれば、それこそ天下の不忠者ということになってしまうであろう。

この場合、皇太子の憲法言及部分をカットした心情はわからないではないが、その判断がジャーナリズムとして正しかったかといえば、そんなことは断じてない。池上彰氏が「こんな大事な発言を記事に書かない朝日新聞の判断は、果たしてどんなものなのでしょうか」と、手厳しく批判しているとおりだ。ジャーナリズム失格！

3

それでは、もし本当に、菅野社会部次長が「お答えします」で説明しているように、皇太子の憲法言及が「新しい内容」ではないのでカットしたというのであれば、それは、いま現在、いったい何が問題となり重要なのか、いまジャーナリズムとして何を伝えなければならないのか、といったことすら全く念頭になかった、ということに他ならない。それこそ、まさしくジャーナリズム失格！

池上彰氏は、皇太子の「謙虚に過去を振り返る」という発言の前の、これもカットされてしまった部分の重要性をも指摘しつつ、「新聞ななめ読み」（朝日 2月27日）をこう結んでいる――

「記者やデスクの問題意識の希薄さが気になります。」

谷川昌幸(C)

2015/03/11 at 13:29 カテゴリー: [平和](#), [情報IT](#), [憲法](#), [歴史](#)

Tagged with [皇太子](#), [天皇](#), [戦争責任](#), [朝日新聞](#), [歴史認識](#), [池上彰](#)

「改宗の権利」勧告英大使，辞任

スパークス駐ネ英国大使が，2月27日付で大使を辞任し，帰国することになった。30年にも及ぶ外交関係公職からも引退するという。

辞任理由は，公式には，全く個人的なものだとされているが，実際には，[昨年12月の公開書簡 \(Republica, 10 Dec\)](#)にあることはいうまでもない。この書簡で，スパークス大使は，制憲議会議員に対し，「改宗の権利」を新憲法に書き込むよう勧告し，これがネパール各界からの激しい反発を招いていたのだ。スパークス大使は長い経験を持つベテラン外交官であり，そのような公開書簡を出せば，どのような反応が起こりうるかは，事前に——おそらくは大使館スタッフも交え——十分検討し，その上で，公開書簡を発表したと見るべきだ。換言するなら，パークス大使，あるいは英国政府は，「改宗の権利」の憲法保障の実現は，大使の職を賭してでも働きかけるに十分値する，と判断したのではないかと思われる。

英国外交は，ことさほどに老練と見るべきであろう。



スパークス大使

[参照]

[改宗勧奨: 英国大使のクリスマス・プレゼント](#)

[宗教問題への「不介入」，独大使](#)

谷川昌幸(C)

2015/03/01 at 14:33 カテゴリー: [外交](#), [宗教](#), [人権](#) Tagged with [イギリス](#), [内政干渉](#), [改宗](#), [信仰の自由](#)